

高温・干ばつ・用水不足対策

9月

水 稲

水稻節水栽培基準を参照のうえ、適切な水管理を行う。

- 1 短期栽培（6月中旬植えコシヒカリ）、普通期栽培（早生品種：あきさかり、はえぬき等）
落水期（成熟期前 5～7 日）頃までは黒湿り程度の水分状態を保つ方がよいので、田面が白乾きにならないように走水をして水分を補給する。
- 2 普通期栽培（中生品種：ヒノヒカリ、おいでまい等）
 - 1）登熟前期（出穂開花期後 20 日後頃まで）は、田面の湿潤状態を保つようかん水する。
 - 2）登熟後期（出穂開花期後 20 日～落水期）は、黒湿り程度を保つようかん水する。

大 豆

- 1 畦間かん水の行えるところでは、1 週間間隔でかん水する。この場合、畦間に長時間滞水しないように、走り水程度とする。一方、畦間かん水の行えないところでは、水中ポンプや動力噴霧機等を利用してホースかん水を行う。
- 2 かん水が望めないところでは、土面蒸発を抑えるため、畦間に敷草等をする。
- 3 カメムシ類やヨトウムシ類の多発が予想されるところでは、防除基準に従って害虫防除を徹底する。

茶

- 1 土面蒸散を抑えるため、敷草、敷藁を十分に行う。また、樹勢が衰弱している場合は、秋肥の施用量を減らす。
- 2 かん水施設のあるところでは、水源が確保されれば、少量であってもかん水する。
- 3 クワシロカイガラムシの第 3 世代ふ化幼虫発生期であり、乾燥が続く場合被害の拡大が懸念されるため、ふ化幼虫を確認後、防除を実施する。

野 菜

マルチや敷藁等を活用して、水分蒸発の防止に努め、草勢維持を図るため、追肥は液肥での施用を主体とする。また、高温乾燥により病虫害が多発するおそれがあるので、適期防除に努める。

- 1 かん水、土壌乾燥の防止
 - 1) マルチや敷藁などにより、土壌からの水分蒸発を防ぐ。
 - 2) かん水チューブ等でのかん水が可能で水量が限られている場合は、回数を減らして一回当たりのかん水量を多くし、根群全体に水分供給ができるようにする。かん水チューブ等でのかん水が可能でない場合は、水中ポンプや動力散布機等を利用して、ホースでうねの肩やうね間にかん水を行う。
 - 3) うね間かん水する場合は、うね間が湿る程度に水を流す。この場合、長時間、うね間に水がたまると根が傷む場合があるので、多量の水を長時間、うねにためない。また、水口からほ場全体へ一度に水をうね間に流そうとすると、水分過剰の場所が発生し、根傷み等の原因となるので、土嚢を活用して、2～3 列のうね間にうねの高さの半分程度まで水をため、水がたまったら土嚢を除いて水を流す作業を繰り返し、うね間が均等に湿るよう工夫する。特に、土壌の乾燥が長期間続いている場合は、かん水による根傷みが発生しやすいので、初めてのかん水は、土壌表面が湿る程度の量にとどめ、徐々に適正な土壌水分になるようかん水量を増やす。
- 2 施肥、草勢維持等
 - 1) 土壌が乾燥している状態では、肥料が溶けにくいため肥効が遅れる。露地栽培は雨の前に、施設栽培の場合は、かん水前に施肥を行い肥効を高める。雨が降らない場合の露地栽培や水の確保が難しい施設栽培では、液肥や葉面散布剤を活用して肥料不足にならないよう、草勢維持に努める。
 - 2) 果菜類については、草勢維持のために適正な着果量、葉数になるように管理を行う。

- 3) 土壌の乾燥が続くとトマト、ミニトマト、ピーマン等では、「心止まり」、「尻腐れ果」の発生が心配されるので、カルシウムを含む葉面散布剤を花房、新葉、生長点に十分な量がかかるよう葉面散布する。
- 4) 黒マルチを設置している場合、地温が上がりすぎることによって根傷みや養分吸収阻害が発生し、草勢が低下するので、マルチの所々に切り目を入れるなど、マルチ内の高温の空気を速やかに逃がす。
- 3 施設の管理
施設内が高温となりやすいので、遮光をおこなうと共に、サイドや谷をできるだけ広く開放し、可能であるならば妻面の全面開放により、風通しを良くして内部の気温低下に努める。
- 4 病虫害防除
乾燥後のかん水は、肥効が高まり生育の軟弱徒長により、病気の発生が心配される。また、気温の上昇と乾燥によりアブラムシ類、アザミウマ類、ダニ類、うどんこ病等の発生も予想されるので、防除に努める。

果 樹・オリーブ

- 1 土壌乾燥の防止
 - 1) 敷藁、敷草の実施
根の多く分布している場所へ稲藁、刈草等を厚く敷き、水の蒸散を防ぐ。
 - 2) 草刈りの実施
雑草が繁茂している場合は、刈取りを行う。除草剤の利用にあたっては、接触型および吸収移行型を使用し、土壌処理型は使用しない。
- 2 かん水(節水利用)
水の確保量を勘案して計画的に実施する。
 - 1) 水量が十分確保できる場合は、7～10日間隔で20～30 t /10 a を全面かん水する。(ただし、ミカンでの多量かん水は裂果を発生させるので10 t /10 a 程度とする。)
 - 2) 水量が不十分な場合は、細根が多く分布している部分へ集中的にかん水する。1 樹当たりかん水量は150～200㎖とし、約1週間ごとにかん水する。
- 3 樹勢の維持および樹体の保護
 - 1) 結実量が多い場合は早急に摘果する。(柑橘、カキ、キウイフルーツ)
 - 2) 着葉数の少ない樹勢衰弱樹や移植樹は、枝幹の日焼けを防止するため、白塗剤を塗布する。
 - 3) 収穫の終わったブドウへの礼肥は降雨後に施用する。
 - 4) 薬害防止のため、高温時、日中の薬剤散布を避ける。
- 4 病虫害防除
高温乾燥により、ハダニ類、アザミウマ類、カメムシ類等の発生が助長されるため注意して防除を徹底する。

花 き

- 1 敷藁、マルチの励行
マルチや稲藁等を活用して、土壌からの蒸散を抑制するとともに、地温の上昇を防ぐ。
- 2 病虫害防除
ダニ類、アブラムシ類、スリップス類、ヨトウムシ類などの発生が多くなるので防除に努める。
高温時の散布は薬害が生じやすいので、朝夕の涼しい時に薬液濃度を薄めにして散布する。
- 3 かん水
かん水時刻は高温時を避けて、早朝あるいは夕方に行う。
限られた水量を使用する場合、回数を減らしても一回当たりのかん水量を多くし、根群全体に水分供給ができるようにする。
- 4 遮光資材の利用
高温障害が予想される場合は、遮光資材を掛けて、気温の上昇を緩和する。特に定植から活着期にかけては、遮光を行い活着促進を図る。
- 5 施 肥
追肥は高温・干ばつが解消されるまで中止し、もしどうしても必要な場合は、置き肥でなく薄

めの液肥を与える。

6 電 照

キクなど高温乾燥によって花芽分化を起こしやすいものは、電照開始時期を早めるとともに電照時間をやや長くする。

7 土寄せ

根量を増加させるため、できるものは株元に土寄せし、新根の発生を促す。

畜 産

1 家畜管理

家畜の飲用水は十分に確保するとともに、防暑対策を確実に実施して、家畜の事故発生と生産性の低下を防止する。家畜の異常は早期に発見し、初期の治療に努める。

1) 畜舎環境の改善

- ①ファン送風の実施、通風の改善
- ②直射日光の遮光、日陰樹の利用
- ③飼育密度の軽減等

2) 飲用水および飼料の管理

- ①十分な飲用水の確保（貯水タンク設置、井戸の活用、飲水器からのこぼれ水防止等）
- ②畜舎やパーラー等関連施設等で利用する水の節減（除ふんを徹底して、消毒の効果に支障をきたさない程度に節水）
- ③飼料の早朝および夜間給与（比較的涼しい時間帯に実施）
- ④飼料保管管理の徹底による変敗防止等
- ⑤必要に応じ、ビタミンやミネラル等の補助飼料を適正に給与

2 飼料作物

収穫可能な飼料作物は早急に刈り取り、サイレージ等に調製する。粗飼料不足が懸念される場合には、イタリアンライグラス、エン麦等の秋作栽培も含め、冬作の作付草種、時期等を調整する。